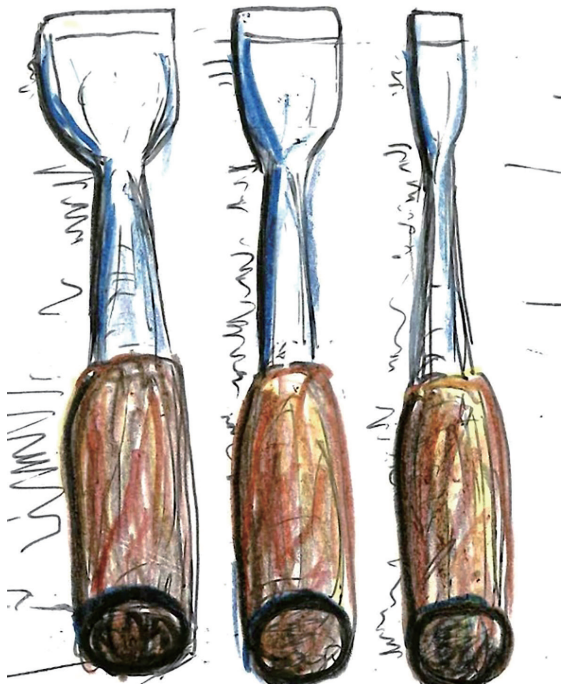


# 左甚五郎 その三

福岡職業能力開発促進センター 和田 正博

## 1. 甚五郎の『のみ』

「弘法筆を選ばず」というが、これはまっかなウソだ。本当の名人達人は、道具作りの名人。職人がもっとも心血を注ぎこまなければならないのは道具、なかんずく刃物だ。特にどんな刃物も研ぎの違いで全てが決まる。名工と凡人の差は紙一重なのだ。



Masahiro Wada

重い腰をやっと上げ、「三井の大黒」をこしらえ始めた左甚五郎。仕事はじめは使う工具の刃先を研ぐことから始まる。大事にしまっていた師匠から譲り受けの『のみ』を文机に並べた。「端切れが少し柔らかいからな」と独り言。やや刃を鋭角に研ぎな

おすのに二晩。すべての『のみ』を研ぎ終わるのに不眠不休でさらに二晩。仕事は段取り。準備万端整ってから、部屋の床の間に安置していた端切れを手にし、『のみ』を入れた。あとは、心を無にして座っておれば、『のみ』のほうで勝手に端切れの中に隠れている大黒を掘り出していく。

## 2. 大黒（だいこく）

甚五郎の荒加工はすさまじく速い。そのうえ、正確に刃を入れていく。が、仕上げ代はあえて厚目に残す。彼ほどの腕ならば、仕上げ代を薄くしても万が一つにも削り損ずることはない。が、速く仕上げるだけでは甚五郎の作品の肌触りは出てこない。仕上げを丹念に何度も繰り返し、時間をかけて削っているうちに、仕上げの『のみ』の刃先がなじんでくる。その微妙に摩耗した頃合いのよい刃先でないと「味」が出てこない。それが彼の作品の真骨頂なのだ。甚五郎は何度も何度も薄い仕上げをていねいに繰り返した。「精魂こめて」とは、この時の甚五郎の姿のことなのだろう。

最後に薄紙一枚をはがすかのように大黒が姿を現した。「よし」とつぶやいたときには、その精魂はすっかり尽き果てている。

頭を上げた時には気がすっかり抜け、『ポン助』に戻っている。

一方棟梁も二階から聞こえる物音で『ポン助』があまり寝ていないのを心配していた。かなりやつれて降りてきた『ポン助』に「おいおい、寝てないんじゃないかい。大丈夫かい」「なあに、大丈夫さ」そして、『ポン助』はたまたまそこに居合わせた若い衆の梅

に声をかけた。「おい、<sup>でっち</sup>「丁稚」「丁稚じゃないし」「いいから」と、手紙を持たせて「これを」と耳打ちし、どこかに使いにやらせた。<sup>とうりょう</sup>「棟梁、『いこいの湯』に行かせてくれないかな。」政五郎は湯札と一緒に<sup>ふとこ</sup>懐から小銭も出しながら「こっちもありがてえよ。最近、おめえさんの臭いに閉口していたのさ」と笑う。「棟梁、相変わらず口が悪いね」と『ポン助』。湯札とおコヅカイをもらおうと出かけていった。



### 3. 陰から陽へ

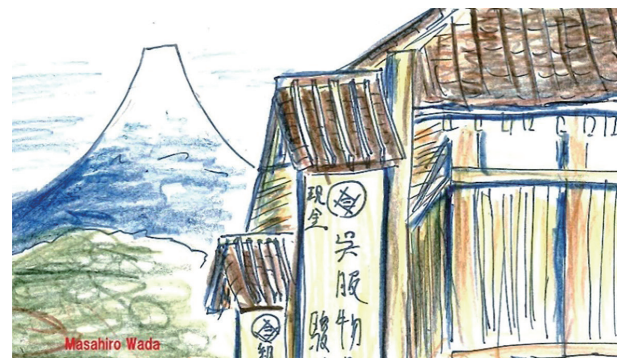
疲れ果て、そのくせ何かをやり遂げた充実感を漂わせた『ポン助』。その背中を見送りながら棟梁の政五郎に好奇心が湧いてきた。『ポン助』が作った<sup>だいこく</sup>大黒を無性に見たくなった。二階に上がり、『ポン助』の部屋に初めてそっと入った棟梁。「おう、さすがだな。きれいに片付けているな。ん。なんだ、『のみ』を持っていたのか。」いぶし銀の光を静かに放つ『のみ』、柄に美しく使い込まれた木目を浮かべている。「これは…」。

その『のみ』が持つ風格に政五郎は言葉を失い、魂までも刃先に吸い取られるかのように、かなり長

い時間、その『のみ』を見つめていた。「やはりただの大工じゃなかったんだ」不思議と音も消え、シンとした時間がしばらく流れた。

ふと、政五郎が顔を上げると部屋の片隅に三寸くらいの布切れのかかったものを見つける。「これかな」布切れをとるとそこには<sup>だいこく</sup>大黒の像。その時、たまたま窓から差し込んでいた日の光を大黒が受けてしまった。陰から陽に<sup>だいこく</sup>大黒は生を<sup>やど</sup>宿した。閉じた目をパッと開き、<sup>とうりょう</sup>棟梁の顔をじっと見てニヤニヤと笑ったと伝わる。

### 4. <sup>するがまち</sup>駿河町の三井



ちょうどその時、階下から声が聞こえた。「ごめんくださいまし」来客だ。「はっ」と我に返った二階の棟梁「へーい、だれかいねーのかい。まったく、今行きますから」と軒先まで下りて行った。そこに立っていたのは、左甚五郎からの知らせを受けた<sup>するがまち</sup>『駿河町の三井』の番頭の<sup>とうべえ</sup>藤兵衛だ。「こちらに<sup>ひだ</sup>飛騨高山の棟梁、左甚五郎先生は御在宅では」との言葉に、線が全てつながった。棟梁はやっと『ポン助』が左甚五郎だとわかる。

「どうぞ、こちらにおかけになって、お待ちください。もうじき湯から帰ってくると思います。」と、<sup>とうべえ</sup>藤兵衛に座布団を勧めた。

しばらくして、路地の向こうから湯上りでご機嫌な甚五郎が、鼻歌でも歌いながら帰ってきた。その<sup>のうてんき</sup>能天気な姿を見ながら、「なるほどね、さすがあ名人は違う。『能ある豚はヘソを隠す』ってえ奴だ」と、<sup>とうりょう</sup>棟梁政五郎は独り言も口が悪い。「おやあ、これは<sup>とうべえ</sup>藤兵衛さん久しぶり。あ、<sup>とうりょう</sup>棟梁ただいまあ」「棟梁

はよしてください。先生、あなた左甚五郎先生なん  
でしょ。あんた人が悪いや」甚五郎も湯上りで上気  
した顔をさらに赤らめて笑いながら「いや、いい湯  
に入らせてもらったおかげでやっと自分の名前を思  
い出したよ」「そんなわけあるかい」政五郎が笑う。

三井の番頭藤兵衛、「では、改めさせていただきます  
と大黒様を手にした。「これは見事な…」言  
葉を失い、目を見開き、これまた魂を吸い取られる  
ようになり長い時間大黒を見つめていた。

奥からそっとのぞいていた梅。初めて見る甚五郎  
の大黒を見て仰天した。「うわ、こりゃすげえや…」  
目を見開いたまま、梅もついでながら魂を吸い取ら  
れた。

三井から値付けの一切を任されていた藤兵衛、こ  
の甚五郎の大黒に対し、「では150両でお願いしとう  
存じます」と途方もない値を付けた。「そんな過分な」  
という甚五郎にかまわず、藤兵衛さらに「お口汚し  
ですが」と名酒の酒樽を置き、さかな代として20両  
をおまけにつけて甚五郎に渡した。

「うお、やった」奥で梅がはしゃぐ。棟梁、声  
を押し殺して「みともねえよ」としかりつける。が、  
顔が笑っている。よく見ると人の良い棟梁、笑った  
目が潤んできている。やがて、番頭藤兵衛は大黒を  
大事に抱えて帰っていった。大黒を見送る甚五郎。  
わが子を嫁に出す感情に似て、一抹の寂しさを覚え  
た。

振り返るや否や、「よし、みんな。これで一杯や  
ろうよ」「わあ万歳」と今度は棟梁も一緒に一同が  
沸く。梅が「魚河岸まで行ってきやす」と飛び出し、  
程なく、大事に大黒を抱え歩いている番頭藤兵衛を  
追い抜いて魚河岸まで走っていった。その夜は、大  
宴会で盛り上がったのは言うまでもない。笑い声を  
響かせながら、江戸の夜は更けていった。

## 5. 江戸の仕事

三井の大黒の評判はあつという間に江戸中に広  
まった。寺社のみならず、幕府からも多くの仕事が  
舞い込んだ。左甚五郎は結局その後も長年にわたり、  
棟梁政五郎に厄介になりながら江戸で仕事をつづ

けた。遠い他国からの仕事も政五郎のところにやっ  
てくるようになった。その後、左甚五郎は政五郎の  
息子、すなわち二代目政五郎と日本全国を旅しなが  
ら数々の伝説の名作を残していった。そうやって二  
代目を立派に育てあげ、政五郎が隠居し、二代目が  
跡目を継いだ後もしっかり後見役を務めた。

もうこのころの政五郎一家の仕事は焼けて当たり  
前の急ぎ仕事から、百年千年の後世に残るような仕  
事になっていた。あれほど、甚五郎にほろくそに言  
われていた松も、板をはがせなかった梅も、その後、  
意外な速さで恐ろしく腕を上げ、「人は変われば変  
わるもんやなあ」と甚五郎に一泡も二泡も吹かせて  
やった。そして年を重ねるほどに、彼らも名工と仰  
がれていった。



日光東照宮の「眠り猫」、寛永寺の「水のみ龍」。  
秩父神社の「子宝・子育ての虎」、「つなぎの龍」な  
ど、左甚五郎由来の伝説の作品もこのころに多く作  
られている。どの作品も面白いのは「夜な夜な動き  
出して暴れたり、水を飲みに行ったり」という伝説  
がついて、現代まで残されていること。

彫ったものに魂が宿るので動き出すという話がた  
くさん残っている。でもその中には、松や梅が彫っ  
たものがあるのかもしれない。

## 6. あとがき

前述したが、左甚五郎については、詳細不明。ゆえ  
に、いろいろな逸話や伝説が生まれやすかったのだ

ろう。彼を題材にした、講談や落語は江戸時代から常に大ヒット。人々の心をつかみ、今も残る名作になっている。この文章のお手本となった「三井の大黒」以外にも「竹の水仙」「ねずみ」「たたき蟹」などがある。時代とともにいろいろな手が加わり、実像からはかなりデフォルメされてはいるようだが、左甚五郎も名人ならば、これらの話を作った講談や落語の師匠もその道の芸を極めた達人名人。いずれも真の名人の心根を映した深みのある作品となって面白い。

が、あまりにも、本物の職人の実像からかけ離れたデフォルメも多い。失礼ながら「現場を知らないからな」と、私は思ってしまった。同じデフォルメでも、職人の風景に寄せていったらどうなるか。

私はポリテクセンター福岡で、現代の甚五郎集団ともいべき「北九州マイスター」の名工の方々に会うことができた。二枚の板を合わせた甚五郎をさらに上回るような、マイスターの方々の凄腕、神業を目の当たりにしてきた。いい仕事を後世に残こそうと身を削り、獅子奮迅の影の努力を、人知れず、長年続けていらっしゃる。その姿と、私の心の甚五郎の姿が重なる。これからも、左甚五郎や、マイスターの遺伝子を受け継ぐような名工が、この日本からたくさん生まれることを願っている。



【参考】

落語「三井の大黒」：三代目桂三木助  
落語「三井の大黒」：六代目三遊亭圓生